

月下独酌(李白)

花間 一壺の 酒

独り 酌んで 相 親しむ 無し

杯を 挙げて 明月を 邀え

影に 対して 三人と 成る

月 既に 飲むを 解せず

影 徒らに 我が 身に 随う

暫く 月と 影とを 伴つて

行楽 須らく 春に 及ぶべし

我 歌えば 月 徘徊し

我 舞えば 影 凌乱す

醒むる 時 同じく 交歓し

酔うて 後 各 分散す

永く 無情の 遊を 結び

相 期して 雲漢 邈なり

花間一壺酒 濁酌無相親

舉杯邀明月 對影成三人

月既不解飲 影徒隨我身

暫伴月將影 行樂須及春

我歌月徘徊 我舞影凌亂

醒時同交歡 醉後各分散

永結無情遊 相期邈雲漢

解説 月のもとでひとり酒を酌み、月と影とを友として無情の遊を結ぶ楽しみを述べたもの。

語釈 ※成三人Ⅱ自分と月と影との三人となる。※影徒隨我身Ⅱ影はただ自分について動くだけだ。※將Ⅱ与と同じ。※須及春Ⅱ春のうちにすべきである。※徘徊Ⅱぶらつくこと。

※凌乱Ⅱ乱れ動くさま。※酔後各分散Ⅱ酒に酔つて眠り、月や自分の影ともわかれてしまうことをいう。*無情遊Ⅱ人間としての感情を持っていないものとの風流な交わり。※相期Ⅱふたたび会うことを約束する。※邈Ⅱはるかに遠いこと。※雲漢Ⅱ天の川

通釈 花の咲きほこるもとで一壺の酒をひとり酌んで、語り合える仲の良い相手もない。そこで盃を挙げて明月を迎え、わが影と三人になった。ところが、月は酒を飲むことが出来ないうし、影は影でただ自分につき従うばかりである。酒の相手としては不十分だが、ともかくも月と影とを相手にして、この春のうちに楽しみ尽くそう。自分が歌うと月は彷徨うようであり、自分が舞うと影はゆれ動く。まだ酔わないうちは我々三人ともに遊びあい、酔って眠ってしまったと、三人ともちりぢりとなる。いつまでも人情を離れた風流なつきあいを結び、はるかな天の川で再会を約束する。